

ESPRIT

日本武道学会剣道専分科会会報 [2006春]

会長挨拶 杉江正敏 (大阪大学)



この度、私儀、佐藤成明前会長のご勇退をうけて会長に推挙されました。私は関西在住ということもあり、幹事会などに遅参も考えられ固辞いたしました。まずは一期ということでお引き受けすることとなりました。

武道学、特に剣道の科学は、方法は多様であろうかと存じますが、実践にねざしたものでありたいと願っております。これは近世中期以降の知行合一や事理一致の思想を背景として成立してきた剣道の宿命であり、保持すべき伝統性でもであろうかと考えます。

ここに思いをいたすとき、どうしても中林信二先生のことが想起されるのでございます。早稲田大学の寒川恒夫先生のご尽力で『スポーツ文化論』（杏林書院 pp200～204 1994）に「近世の稽古論」というテーマで拙稿を掲載していただきました。この著論を、1 稽古論の系譜と、2 近世稽古論の諸相という構成にして、1の「まとめ」として中林先生の「稽古による技と心」を紹介しました。少し長くなりますが、その一部を引用します。

中林は、「体育における身体活動を考えるとき、いわば、その身体的実践における自己実現の問題を考えるとき、日本の伝統的身体文化の稽古論、修行論における技術学習と身体性の問題が一つの重要な手がかりになると思う。」と提言し、「私自身の体験的な非学問的な、よくいえば主体的な関心にしたがって考えてみたい。」と、一見謙遜とも思える表現で論旨を述べている。これは中林に一貫した研究態度であり、自分は修行者であり、教育者であるという信念であった。…中略…このように論を展開した中林は、「三、“身体で覚える”ことについて」へ導入し、西田の「行為的直観論」を手がかりに「技と心」の問題の解釈を試みた。

さて、大阪大学では、「直観力を高める授業」の実践が、来年度の応募授業の第一に取り上げられております。これは、今の学生さんが、あまりにも多くの知的集積を要請されることによるものか、その集積を瞬時に統合し、回答を導く能力に物足りなさが感じられていることによるもので、主に数学や物理で導入が図られているとのことです。本学の坂東さんをけしかけて、剣道の学習をテーマに、この授業に応募してもらったところ、選考者は幾分とまどったようですが、採択が決定し予備調査費をものにしました。

近時の青少年層に共通してみられる「心配事」は、知的学習と並行的・同時的に、行為・行動・運動を通じて獲得すべき、臨床知（体験知）が十分に備わっていないことではないでしょうか。剣道が、この「心配事」の幾分か軽減に役立つのでは、と考えているのは、私一人ではないでしょう。近代武道の理念的創始者嘉納治五郎の原点が、近代日本の青少年教育にあったことは周知の通りです。分科会各位の専門性に基づく指導学習法研究が、今後ますます期待されます。いささか、文体が固くなりましたが、これをもって御挨拶とさせていただきます。

E S P R I T

フィンランド剣道紀行

異文化の中の日本文化 驚愕, 感動そして感謝

酒井 利信 (筑波大学)



昨年、北欧フィンランドに全剣連派遣講師として行かせていただいた。期間は2005年2月16日から5月1日まで、大きな期待と半分以上の不安を胸に出発したのがちょうど一年前になる。本来であれば、早い時期にレポートを作成すべきであったが、二ヵ月半という短い期間に実に様々なことがあり、帰国後頭の整理がつかなかったことと、また結局のところ忙しさにかまけてしまい今に至ってしまった。一年がたち、ようやくセピア色の良い思い出として整理できるようになったような気がする。今回の経験は、私にとって貴重な財産であり、これが風化してしまわないうちに皆さんに紹介しておこうと筆をとった次第である。

フィンランドへ

ヘルシンキ空港に到着して最初に外気に触れたときの感覚は、今でも忘れることができない。2月のフィンランドは極寒。首都ヘルシンキでもこの時期マイナス10度、夜ともなればマイナス20度以下になる。凍った海の上を人が歩いているのを見て先ずは驚いた。聞くところによると、海や湖の上を車も走るらしい。しかし屋内は浴室や洗面所どこでも暖かく快適そのもので、半袖のシャツでくつろいでいたりもする。

ここで多少フィンランドという国を紹介しておく。日本よりやや小さめの国土に住む人口は500万人余りと比較的少なく、多くの国民がフィンランド語を話す。文化程度は非常に高く、教育に力を入れており、特に語学の能力は例外なく優れている。英語でコミュニケーションをとれない人は皆無に等しく、数ヶ国語話す人も珍しくない。国民性は日本人に似ているといわれ、男性は概してシャイで非常に優しい。対して女性は元気のある人が多い印象を強くもった。

派遣中の私の仕事は主に二つあり、ヘルシンキに滞在し主にナショナルチームの強化をすることと、地方にあるクラブをホームステイをしながらまわり普及あるいはレベルアップをはかることである。この二つをほぼ一週間ごとにこなすといった生活であった。

いずれにせよマイナス10度のファーストインプレッションから、旅行ではなくフィンランドでの生活そのものが始まった。

フィンランド剣道連盟

フィンランド剣道連盟は、首都ヘルシンキで活動するクラブを中心によくまとまっており、特に技術局長である Mikko Salonen と Markus Frey の二人が指導者として全国を掌握している。共に六段であり、オーソドックスで立派な稽古をする。会長は年長者が持ち回りでやっているようで、この三十代半ばの二人のリーダーをサポートしている。連盟のマネージメントは、Mikko Salonen の奥さんである Susanna Salonen が取り仕切っている。非常に優秀なマネージャーであるが、自身剣道五段であり、かつてはヨーロッパで名を馳せた選手であった。彼女なくして連盟は動かない。本当のボスは彼女かもしれない。その他に日本留学の経験があり日本語に堪能な Heini Inkinen が、若手のリーダーとしてあげられよう。

ESPRIT

ヘルシンキには、「気剣体一致クラブ」「ヘルシンキ大学剣道部」「エラ剣会」といったクラブがあり活発に活動している。その中でも「気剣体一致クラブ」は、最も古くから活動をしており会員数も数百人と非常に多く、レベル的にも他を圧倒している感がある。

地方にも熱心に活動をしているクラブがある。私が訪問した都市をあげると、ポリ(Pori)〔大熊剣会〕、ラヒティ(Lahti)〔志剣会〕、ハメーンリンナ(Hameenlinna)〔城剣会〕、トゥルク(Turku)、オール(Oulu)〔北風〕、タンペレ(Tampere)、ミッケリ(Mikkeli)、クオピオ(Kuopio)〔翔剣会〕など、活動状況は色々であるが例外なく熱心に剣道に取り組んでいる。

ヘルシンキと地方クラブとの連携は非常によく機能しており、指導体制や経済面など細かな取り決めがなされている。従って、私のような派遣講師の取り扱いも手馴れており、マニュアルどおりにこなされているといった感じであった。しかし無機質ではなく、心のこもった対応であるところに感心した。訪問した日本人指導者は例外なく良い印象をもって帰るようであり、再び来フィンする率は非常に高いようである。

剣道の質は、概してオーソドックスで立派なものである。いわゆる玄人好みするもので、これにはかつて来フィンし指導をされてきた日本人指導者の影響も多分にあると思われる。これまでに全剣連から派遣された講師を列記すると、上松大三郎先生(自衛隊)、高橋亨先生(東京芸術大学)、岩立三郎先生(空港警備隊)、武藤志津夫先生(福島県警)、石塚美文先生(大阪府警)、恩田浩司先生(警視庁)、近藤巨先生(徳島県警)、横山直也先生(横浜国立大学)、大田順康先生(大阪教育大学)、竹田隆一先生(山形大学)、山神眞一先生(香川大学)、八木沢誠先生(日本体育大学)、岩切公治先生(国際武道大学)、そして私である。

サウナパーティーでのイニシエーション？

フィンランドではどこのクラブにいても「サウナパーティー」という歓迎会をしてくれる。この国はサウナの本場であり、サウナに入りながらパーティーをするのである。ヘルシンキの「エラ剣会」での初稽古の後、20名ほどであったろうかサウナパーティーを開いてくれた。これは初めての経験であり、サウナの中でビールを飲むのにはビックリしたが、その中でKari Jaaskelainenというリーダーがいうには「フィンランド人はサウナパーティーの時には必ず外に出て雪の中にダイブする」というのである。外はマイナス20度、もちろん最初は断ったがあまりしつこく言うので、何事も経験とばかり外に飛び出しサラサラのパウダースノーの中に頭から飛び込んだ。寒さも痛さも乗り越えた表現しようもない強烈な感覚に急いでサウナに引き返した。皆大喜びしてくれたが、ふと気がつくとうち一人(Akseli Korhonen)しか一緒についてきていなかった。Kariになぜ一緒に来なかったと問いただすと、答えは“too cold”(寒すぎる)、次に発した言葉は“Mitori-geiko”(見取り稽古)だった。完敗。

その二週間後、ラヒティ(Lahti)という地方都市のクラブが開いてくれたサウナパーティーで、今度は湖上に厚く張った氷に穴を開けて作ったプールに入るはめになる。

その後、彼らとの距離は急速に近くなったような気がする。これはイニシエーションだったのか？

地方巡業

ヘルシンキに居る間はアパートをあてがってもらい、当初生活習慣の違いに戸惑うこともあったが、慣れれば非常に快適であった。しかし、これが巡業ではないが地方をまわって指導するとなると勝手は違う。先ず、ホームステイをしながらまわるので、最初は非常に気を使う。ホストファミリーとも打ち解け、居心地が良くなったころには次の町へ移動である。知らない人が迎えに来て、知らない町へ行き、知らない人の家に泊まり、知らない場所で稽古する。数日毎にこれが繰り返される。なかなか出来ない面白い経験である。

またその地方のクラブの様子は行ってみなくてはわからない。有段者も多く数十人で盛んに活動している場合もあれば、初心者が4人でやっている場合もある。剣道の指導は主に基本を中心に行った。特に「木刀による剣道基本技稽古法」は、全ての都市で指導してきた。地方で指導してみて、これが非常に良く出来たものであるということを実感した。というのは、木刀を使ってこの形そのものを指導することはいうまでもなく、クラブのレベルが行ってみなけ

ESPRIT

ればわからない様な状況の中で、つまり事前の準備は無意味でありその場で即座に指導プランを起こさなくてはならないような状態の中で、竹刀をつかっただけの稽古においてもこの稽古法の順序通りに組み立てていけば受け手側の理解度という点においてほぼ間違いがなかったからである。

どこの都市においても、有難いことに、日本人の指導者が来るということで非常に楽しみにしてくれていた。今更ながら、いい加減な気持ちで指導に当たってはいけないと痛切に感じた。

いずれにせよ毎回、地方巡業のたびに数キロの減量に成功し、ヘルシンキに這うようにして帰っていった。わずかな週間で既にヘルシンキのアパートは、精神的にはマイホームになっていた。そして言うまでもなくヘルシンキでは、ビールとマッカラソーセージによって次の巡業までの間に結果的には数キロの増量を達成していた。

ヘルシンキ・キャンプ

フィンランドに滞在中、地方も含めて数回のキャンプを行ったが、最も規模の大きかったものは3月12日・13日の二日間にわたってヘルシンキで行ったものである。これには日本から来フィンした竹田隆一先生（山形大学）・斎藤浩二先生（仙台大学）・小林日出至郎先生（新潟大学）率いる東北地方の大学生二十数名が参加し、総勢111名という大規模なものとなった。レベル別に班分けし、各先生方にも一班ずつ担当して指導していただいた。基本指導・互角稽古の他、日本の大学生とフィンランド・ナショナルチームの練習試合なども行い、非常に有意義なものとなった。



彼らは例外なく剣道に対して純粹であり貪欲であり、そしてたくましい。これに関連して一つ驚いたことがあった。このキャンプにはフィンランド全土から剣士が集まってきたが、彼らは寝袋を持参し体育館のようなところに泊まる。ポリで行われたフィンランド選手権の

時もそうであった。勿論ホテルはあるが、ほとんどの者が体育館に寝袋である。聞けばヨーロッパでは、こういったことは珍しくないようだ。ぎりぎりの経費で剣道のキャンプに来るのである。日本ではホテルに泊まる費用がなければキャンプへの参加は不可能と考えるだろう。しかし彼らは違う。そこまでして貪欲に剣道を習いたいと純粹に思っている。現在指導している日本の大学生に、ここまでの純粹さ、貪欲さ、たくましさがあるかどうか考えさせられた出来事であった。

家族の来フィン

今回の派遣期間中、四週間にわたって家族もフィンランドを訪問し、一緒に地方にも行くことが出来た。家内と五歳の娘、三歳の息子である。このことは我々家族にとって非常に有意義であったことはいうまでもない。こういった我がままを受け入れてくれたフィンランド剣道連盟に深く感謝したい。

途中ホームステイ先で、子供が四十度近い熱を出したり、夜中に鼻血がとまらなくなったりと大変な経験もしたが、サンタクロース発祥の地といわれるロバニエミ(Rovaniemi)という北極圏の町で「本当のサンタクロースに会えた」といって喜んでた子供たちの顔は生涯忘れることが出来ないだろう。これにはちょっとしたエピソードがあった。前年のクリスマス直前、娘に頼まれてサンタクロースに電話をさせられた。父親の威厳を保とうと相手のいない受話器に向かって英語で希望のプレゼントを伝えたのだが、今回娘の会った本物のサンタクロースは流暢な日本語を喋る。娘の純粹な詰問に大いに慌てた。

何よりもホストファミリーには大変な迷惑をかけたことと思うが、家族でフィンランドの家庭を経験できたことが

ESPRIT

良かった。子供たちも多少たくましくなったような気がする。

また、ヘルシンキのアパートでは、それこそ生活をしなくてはならず、言葉の通じない国で食事の買い物にも苦慮するであろうと思っていたが、案外家内は平然と片言の英語で買い物をし、観光にショッピングにと楽しんでたようだ。女性のたくましさを再認識した四週間であった。

ヨーロッパ選手権

フィン剣連が全剣連に対して毎年講師派遣を要請している一つの理由は、ヨーロッパ選手権(European Kendo Championships)に向けての強化である。そのヨーロッパ選手権が、4月15日から17日までスイスのベルンで開催された。29カ国が集い、男女団体戦、個人戦が行われた。結果は以下の通りである。

Men Individual : 1.Blanchard Herve(France) 2.Ulmer Jan(Germany)

Ladies Individual : 1.Garcia Clemence(France) 2.Destobbeleer Aurelia(France)

Men Team : 1.Spain 2.France 3.Italy 3.Germany

Ladies Team : 1.Germany 2.Hungary 3.Poland 3.France

我がフィンランド・チームは上位に食い込むことは出来なかったが、男子団体ベスト8を筆頭によく健闘したと思う。特にファイティングスピリット賞を獲得したMia Raitanenの奮闘振りには目を見張るものがあった。前年が男子団体準優勝ということもあり、チームのコーチとしては責任を感じざるを得ないが、全員が良く頑張ったと思っている。長年チームのキャプテンを務めてきたMikko Salonenが、この試合を最後に選手を引退することを表明した。長年にわたる彼の功績に敬意を表したい。

この大会では、多くの人達との出会い再会があった。高校時代の同級生がノルウェー・チームのコーチとして来ており現地ではばったり再会したり、大学院時代同じ釜の飯を食った阿部哲史氏(ハンガリー在住、当チーム団長)とも期間中飲み明かした。またヨーロッパ各地に在住の日本人指導者が夜な夜なホテルのロビーに集まり、彼らと飲みながら語り合うこともできた。貴重な人脈を得たと思っている。

季節はずれの雪が降り、途中停電などもあるなか、大会は無事終了し、狂乱のサヨナラ・パーティーを最後にベルンを後にした。



日本文化講演会

この派遣期間中、何が私にプレッシャーをかけていたかということ、これである。4月10日、日本大使館が主催する日本文化祭(Japanese Day)において、講演をすることになっていたのである。"Japanese Spirit and Japanese Sword"と題し一時間、しかも通訳なしの英語でということである。これに向けての準備は正直いって非常に大変だった。講演内容の吟味、英訳、パワーポイントのスライド作成、発表練習。フィンランドに到着してからの私のプライベートな時間は全てこれに費やされたといっても過言ではない。

講演内容は以下の通りである。

1. What is Budo?
2. What is the Concept of Sword?
3. Kendo and the Concept of Sword
4. The Concept of Sword in the Edo Period

ESPRIT

5. The Concept of Sword in the Middle Ages
6. Ancient Japan's Concept of Sword
7. Ancient Korea's Concept of Sword
8. Ancient China's Concept of Sword
9. Epilogue: The Spirit of the Japanese and Budo

当日は大盛況で、定員70名ほどの文化センターの講堂に144名が入り、立ち見が続出、すし詰め状態であった。それでも入室制限をし、予定より少し早めに開始した。終了したときの満場の拍手は生涯忘れることが出来ないだろう。えも言われぬ達成感があった。確かに多くの負担があったが、それだけの成果は得られたと思うし、今考えると自信にもなっている。こういった機会を与えてくださったことに心から感謝している。

これについての英文の内容は、いずれどこかに発表しようと思っている。

おわりに

後半一ヶ月は時間の経つのが早かった。ヨーロッパ選手権を終えてフィンランドに戻るとあっという間に帰国の時を迎えた。来フィン時には昼間でも薄暗く気温は常に氷点下でどこもかしこも真っ白な世界であったのが、4月末の帰国時には太陽の光がふりそそぎ外気も暖かく人々が生き活きと輝くように見えていた。帰国間際、この二ヵ月半「自分は彼らのために何か出来たのだろうか？」という疑問が沸々と湧き上がっていた。

日本だけで剣道を指導しているときは、現代社会において剣道をやる意義は最終的に人間形成であると思ってやってきたし、今もそう思っている。事実、日本の歴史の中で剣道は人格陶冶の手段として発展してきた。しかしこれが海外でも通用するか？多くの海外文化圏において人間形成つまり道徳教育は宗教によってなされてきたし、現在もそうであろう。彼らにとって竹刀でお互いに打ち合う技術を学びながらその目的を人間形成に求めるというのには無理があるように思う。彼らにとっては既存の宗教等々があり、何もそれを剣道でやらなくてもいいわけで、逆に余計なお世話である可能性もある。事実、前出の友人である阿部哲史氏（ハンガリー在住）は、剣道修行の目的を人間形成であると説いたところ、激しい反発にあった経験をもつという。「私は剣道を習いたい、日本人になりたいわけではない」とまで言われたと聞いた。生き方まで色々言われたくないということであろう。私も各地で同じような経験をした。一方で彼らは非常に純粋に貪欲に剣道を習いたいと思っていることも確かである。彼らが求めているものは剣道の何なのだろうか。今回、剣道の技術指導のみならず特に日本文化の講演を求められたことにもヒントがあるのか。現在でも相当に頭が混乱している。異文化の中の日本文化である剣道に彼らが求めているものは何か？

当分の間、答えは出そうにない。しかし今回の経験で言えることは、我々が当然のことと思ひ込み伝えようとしていることと、彼らが求めていることにズレがあるということ。したがって受け手が要求していることを先ずは知ろうとすることが重要だ、ということか。

帰国前日、有難くも大々的にサヨナラ・パーティーを催してくれた。混乱した頭の中はそのままに、ただただ代えがたい貴重な経験をさせてもらったことへの感謝の気持ちを伝え、浴びるほどの酒を飲みヘルシンキを後にした。フィンエアーのダイレクトフライトで成田空港に着き、湿気が多い日本の空気を肌で感じた時の安堵感も忘れられない。

帰国後、今日まで5団体9名のフィンランド剣士が剣道の稽古をするために来日し、筑波大学を訪れてくれた。私にとってこれが一番の財産である。



会員研究紹介 No.2



吉村哲夫 (ヨシムラ・テツオ)

東海大学 助教授 (体育学部武道学科)

1958年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。東海大学大学院修士課程体育学研究科修了。日本武道学会評議員、剣道専門分科会会員、剣道教士8段。

研究分野：剣道史・スポーツ史・スポーツ教育

現在の研究テーマ：剣道の社会文化的価値について

■研究概要

「剣道の社会文化的価値」-剣道の国際的発展と剣道教育-

現在では、40数カ国に及ぶ世界の国々に剣道が普及しています。また、近年は武士をテーマにした映画の影響によるものか、ヨーロッパ諸国でも剣道人口の増加傾向にあることが報告されています。さらに、新たに中国での剣道活動も活発になってきたようです。これまでに培われた日本の正しい剣道の普及発展が望まれるところです。

しかし、今後はこれまでのように日本人による剣道の紹介や普及活動はもはや必要がなくなったと感じている外国人剣士も少なくありません。当初は東洋文化へのあこがれとして剣道に興味関心を持ち指導を受け入れてきた人たちも、最近は剣道に対する相当の研鑽を積み、日本剣道の現状に対する客観的な分析力を身につけた外国人剣士もかなり認められるようになりました。指導者として活躍する外国人剣士の増加につれて、各国独自の剣道文化の芽生えの時期にあると思われまふ。日本は諸外国に対してどのように主導的立場を堅持していくのか、あるいは、今後剣道が各国スポーツ界のなかでどのような変容を遂げるのか興味深い研究課題であるといえまふ。

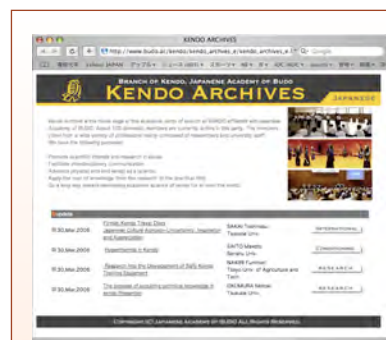
また、我が国では特に明治期以降、学校教育の分野を中心に「剣道教育」が盛んに行われてきました。換言すれば、剣道は人格を陶冶する有効な教育的手段として社会的認知を受けてきたともいえるでしょう。少子化や価値観の多様化する現代社会の中で、今後剣道はどのような社会文化的価値を認められるのでしょうか。優勝劣敗主義を柱に発展してきた近代スポーツの現状は周知の通りです。剣道の持つ競技性をどのような形で学校教育に取り入れていくべきか真剣な論議と早急な対策を講ずる時期にあると感じています。大学教育に従事する人間の一人として、「剣道教育」を課題とする研究への取り組みを計りたいと思っています。現在は、学生剣道における「試合」の意義について考察しています。

■最近の主な著書・論文

1. 「剣道の技術指導に関する研究」東海大学紀要第33号
2. 「学生剣道における試合の意義に関する研究」日本武道学会第37回大会
3. 「剣道の歴史」(財)全日本剣道連盟 分担執筆
4. 「丹田意識とパフォーマンスの向上」東海大学紀要 第30号
5. 「剣道の教育的価値についての一考察」東海大学紀要 第26号

■その他

- ・大学では「剣道史」・「スポーツ史」・「スポーツ文化論」などを担当しています。
- ・全日本剣道連盟選抜特別訓練講習会(第一期)の講師を務めています。
- ・年に数回、欧米やアジア諸国での剣道を通じた国際交流および調査を行っています。



英語ページが公開されました

当会では、剣道学術情報を海外へも発信していくことを目的として、ホームページの英語化を開始いたしました。17年度においては、滝井記念財団からの助成金を受け、4編のコンテンツを英語に翻訳いたしました。今後も積極的に英語化による情報の普及に努めていきたいと考えています。皆様もご協力のほどどうぞよろしくお願いいたします。